

“継続を力にすべく”

日欧・科学技術イノベーションシンポジウム2014

持続的な開催へ向けて

昨年に引き続き、本年も3月に英国、スウェーデンにおいて日本化学会が主催する日欧・科学技術イノベーションシンポジウムを開催した。昨年度、在英国日本大使館奥篤史一等書記官、在スウェーデン日本大使館松本英登一等書記官の貢献によって催された本シンポジウムは、初の試みであったにもかかわらず、高い評価をいただくことができた。そこで、本年度はその持続的な開催に主眼を移して、引き続き両書記官、IVA（スウェーデン王立工学アカデミー）、RSC、瑞日基金、JSPS、日本化学会が密な連携の下に開催への舵を取った。今回も昨年と同様に科学・技術・イノベーションにおける日本発の独創的な研究の紹介とともに、欧州の研究者にも発表していただく形式を取っている。異分野での共同研究からの新たな価値の創造を探っていくことが目的でもある本シンポジウムにおいて、本年は、我々が地球規模で医療の発展に貢献する可能性に焦点を当て、基礎研究をベースに、様々な疾患の治療に役立つ革新的かつ実践的な分子探索技術を生んだとして、高い評価を受けている菅裕明教授（東京大学）を招聘した。

In Sweden

3月3日（月）、Frontiers of Drug Discovery Novel Chemistry と銘打ったシンポジウムを IVA コンファレンスセンターにおいて開催した。Björn O Nilson (IVA 会長)、森元誠二特命全権大使にも参加いただくなか、Anders Ekbolom 博

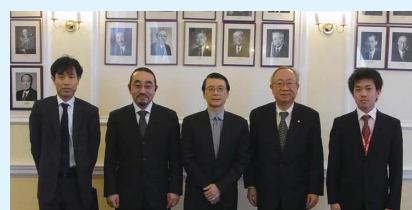


左から菅教授、Nilson IVA 会長、森元特命全権大使

士（AstraZeneca Sweden 前 CEO）による挨拶に続き、菅教授、Prof. Gunnar von Heijne (Stockholm University)、Annika Jenmalm-Jensen 博士 (Karolinska Institute)、Björn Odlander 博士 (HealthCap.) らによる講演が行われ、それぞれの立場から創薬への展望を語っていただいた。

信頼を育む、研究を育む

講演に引き続き、Johan Weigelt (IVA 事務局長兼副会長) を議長に演者全員によるパネルディスカッションが行われ、共同研究による薬剤探索イノベーションの可能性について議論された。近年、ブロードに捉えないと本質を捉えることが難しい問題が多く、共同研究の重要性が増している。サイエンスという一見無機質な分野、学問であっても、それが人間同士のコミュニケーションによって成立する限り、共同研究を支える中核を単純な利害関係だけに求めたのでは、その達成は困難であろう。スウェーデンと日本、お互いにサイエンスの発展を支えてきた、類似した素地を持つ国家間においては、友好的な信頼関係を築きやすいはずである。言葉や文化の違いはあれ、その違いに敬意を示し合える関係を育むことは、異分野、異文化の壁を超えて科学



左から樋口、菅教授、林大使、川島常務理事、加藤

の本質を捉え、社会へ還元しうる良い研究が生まれる上で大切なことであるという事実を改めて認識させられるものであった。

In London

3月7日（金）には Technology & Innovation Symposium 2014 in LONDON を在英国日本大使館ボールルームで開催した。共同主催者として、林景一大使から、大使館を日本の科学技術発信のハブにしたいというメッセージとともに挨拶いただき、伊藤直樹公使、Robert Parker (RSC 最高責任者) とともに、講演会からレセプション終了まで出席いただくなか、ペプチド薬剤開発及びそこに至るまでの経緯についての菅教授の講演に続き、酸化酵素による生体内タンパク合成の調節機構という斬新な視点から切り込んだ Oxford University, Prof. Christopher Joseph Schofield による興味深い講演が行われた。スウェーデン、英国ともに、昨年の吉野彰博士を招いたシンポジウムの成功を受け、化学以外のテーマで数回のシンポジウムを開催しているという。今後も、化学に関して化学会が協力して、シンポジウム開催とともに科学技術・イノベーションに関する交流関係を継続することになった。

〔樋口 岳（東京大学大学院理学系研究科）〕